

中国の師範大学における美術教育課程の キー・コンピテンシーの研究 —陝西師範大学を事例として—

麻 麗 娟
福 田 隆 眞

要旨

中国では、2014年3月に中国教育部により、『全面的に課程改革を推進し、立德樹人の根本的な任務を達成する意見』が公布され、核心素養（キー・コンピテンシー）という言葉が教育領域で注目されるようになった。これにより、中国の基礎教育（初等中等教育）方針が素質教育（資質教育）から核心素養の育成へと転換することになった。核心素養を基に、各教科の授業目標や計画、評価、カリキュラムの開発と実践において、授業現場の各段階に大きな変化があった。本研究は核心素養を背景にし、中国における美術教員の育成のため、小中学校の授業現場でどのようなカリキュラムの開発が適切か、どのように実践されるかについて陝西師範大学での事例を基に考察する。

キーワード

美術科，キー・コンピテンシー，教員養成，カリキュラム開発，授業実践

はじめに

現在、グローバル化する社会で、情報通信技術の発展が激しく進む中、将来の人材の育成や教育の在り方についての研究が世界各国で注目されている。各国の教育改革や国際組織OECDにおいて、キー・コンピテンシー

(key competence) という教育理念が提案され、未来社会に向けて、人材の育成の目標を掲げている。

2013年、中国教育部は『中国基礎教育と大学教育の学生の核心素養についての全体的な枠組み』という課題を北京師範大学の林崇徳教授の研究チームに依頼し、その研究成果を2016年に公表した。中国の学生の核心素養を発展させることへの本質が、生涯学習社会の到来に適応できるように、知識や技能を獲得

することだけでなく、品格と能力が備わることも重要視された。さらに、国務院は2017年1月19日に「国家教育事業の発展“十三五”企画」により、世界の多極化、グローバル化社会、文化の多様性、人工知能の発展など、人々の日常生活から考えまで影響を及ぼし、国際社会に適応できる人材の育成を唱えている。

中国教育部は核心素養という新たな教育方針を施行する目的として、教育の質の向上、グローバル化社会に即した人材を育成するために、詰込み教育からの脱却を図り、素質教育の問題点を改善することとしている。このような背景のもと、本研究の目的は、美術教育における様々な課題に対応ができ、優れた指導力のある美術教員を育成するために、美術教職課程として、どのようなカリキュラ

ムの開発が必要か、どのように実践するかについて考察する。

1 核心素養と美術科の核心素養の関連

1.1 核心素養の概念

素養という言葉は、英語の解釈で「competence」, 「ability」などがあり、個人が備える知識や能力、態度の意味が含まれている。また、中国語の素養で検索すると、「attainment」の解釈があり、学識、造詣などを獲得する意味がある。本稿での素養とは知識、技能、態度、価値観や情感などを含めた総合的な理解とする。

核心素養の研究は世界各国の基礎教育改革のキーワードとなり、中国の基礎教育も時代の変化に対応するため、21世紀における児童生徒の素養を向上させるようにした。核心素養と従来の素質教育には一致するところがあり、素質教育がもたらした課題の反省に伴い、改善を行っている。また、従来の素質教育より、教育目標がさらに具体的、且つ明確化しているため、より実践化しやすくなっている。核心素養という新しい教育方針の施行により、今日の中国の基礎教育における課程内容の選択、教員の研修、授業づくり、学習方式、題材の開発など、授業現場では大きな変化が求められている。

核心素養について、本稿で参考にしたものは華東師範大学の楊向東教授が提言した解釈とする。¹⁾ 要するに、複雑で、不確定の現実的な境地に個人が向かう際に表れた総合的な品格だと理解できる。具体的に言えば、特定の学習から生まれた教科の理念、考え、探求力、さらに習得した知識や技能などを融合して活用し、状況を分析しながら、問題発見から解決までのプロセスで表れた総合的な品格のことである。しかし、核心素養を目標とした学校教育において、各教科はそれぞれの知識や人材を育成する機能が異なるため、各教

科を担う核心素養の教育目標や内容を明確にしなければならない。

1.2 美術科の核心素養の内容

中国教育部は各教科が固有の知識から核心素養を具体化する教科についての教育目標の見直しを求めた。そのため、高等学校の美術課程標準を改訂する専門家チームは、「図像識読（図像を認識し読み取る）」、「美術表現（美術的な表現）」、「審美判断（審美的な判断）」、「創意実践（創意工夫や実践）」、「文化理解（文化の理解）」の五つの美術科の核心素養を掲げた。²⁾ この五つの美術科における核心素養は基礎教育段階での美術科の教育目標となり、学校美術教育改革における新たな変化となった。さらに、この五つの目標は相互に関連し、造形的な視点で、「図像識読」と「美術表現」の最も基本的な素養であり、その上に「審美判断」、「創意実践」、「文化理解」の三つの素養が位置付けられる。それぞれの解釈は以下の通りである。

「図像識読」とは、造形的な視点で美術作品、図形、映像、視覚的な標示の観察、識別及び解読のことである。その具体的な内容とは、想像、比較の方法で全体を観察し、図像に関する造形、色彩、材質、肌理、空間などの特徴を感じ取る。読解、探索、考え、議論などの方法で、図像の内容や意味の識別と解読を行う。多次元、材料、技法、様式及び発展の特徴などで図像の種類を識別と解読を行う。図像は学習や生活、仕事に応用できる価値を認識し、現実世界における視覚的な文化現象及び情報を分析することにより、解読が可能となる。

「美術表現」とは、伝統や現代の媒材、技術及び美術言語で視覚形象を創造することである。その具体的な内容は、ある程度の空間意識や造形意識を持ち、伝統や現代の媒体、技術および美術言語を用い、観察、創造、工

夫および表現などのプロセスを経て、意味のある視覚形象を創造すること。自分の意図や考え、感情を表し、現実世界と結び付き、他の科目と融合して、美術の表現力で、学習や生活、仕事での問題を自ら解決することである。

「審美判断」とは、美術作品や現実の審美対象を感知し、評価、判断及び表現をすることである。その具体的な内容は、美の独特性や多様性を感知または認識し、基本的な審美力を養い、健康的な審美観を形成すること。また、形式美の原理や知識で、自然や生活、芸術の中の審美対象を感知し、描写、分析、評価をして判断することである。さらに、言葉、文字及び図像で自分の審美感を表現し、美術で生活と環境をより良くすることである。

「創意実践」とは、創新的な意識で考えや行動をすることである。その具体的な内容とは、創新的な意識を養い、美術作品の工夫や方法を参考にし、イメージ思考、大胆に想像し、独創性のある美術作品を作成することである。各種の方法で情報を集め、分析して考え、探求し、現実世界と結び付けて、物や環境に実用的な機能や審美感のある創意工夫を行うこと。また、スケッチ、模型などで形にして表現し、コミュニケーションを取りながら、さらに改善を行うことである。

「文化理解」とは、文化の観点から美術作品、美術現象や理念を観察し、理解することである。その具体的な内容は、文化の観点から美術作品、美術現象や観念を観察し、理解する習慣を徐々に養うこと。美術と文化の関係を理解し、中国の優れた伝統美術の文化内容やその独特な芸術的な魅力を認識し、中国文化に対する認識を養うこと。異なる国、地域、民族および歴代の美術作品を通して文化の多様性を理解し、外国の優れた美術作品を鑑賞すること。さらに、芸術家、デザイナー、手工芸の職人の創造的な成果や人類の文化に対する貢献を尊重することである。

以上の五つの美術科の核心素養の目標を達成するために、美術科の知識や技能を現実的な状況にあわせて関連付けし、問題解決学習で、自主的、チームワーク、探究学習の方式で美術の知識や技能を取得する。さらに、日常生活での問題解決に用いることにより、知識や技能から核心素養への転換が実現する。核心素養を背景とした現場の美術科授業において、教育部の教育方針が授業の各段階でどのように施行され、実践されるのか。また、この課題に直面する大学での美術教職課程において、核心素養を背景としたカリキュラムの開発をすることが重要である。

2 日本の学習指導要領における資質と能力

2.1 「21世紀型能力」モデル

日本では、人工知能の高度化、急激な少子高齢化が進む先進国として、時代の変化に対応するための学校教育の在り方を見直している。日本国立教育政策研究所は、2013年3月に「教育課程の編成に関する基礎的研究」の〔報告書5〕において、「21世紀型能力」を提案した。³⁾「21世紀型能力」とは、21世紀を生き抜く力として、これからの学校教育で育成すべき資質・能力となっている。「21世紀型能力」では、「基礎」、「思考」、「実践」の三つの要素で構成される。基礎力に関して、(言語スキルや数量スキル、情報スキル)、思考力(問題解決、発見、創造力と論理的、批判的思考力。メタ認知、適応的学習力)。実践力(自律的活動力、人間関係形成力、社会参画力、未来への責任)。この三つの力が相互に関連し、「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」、その使い方を方向づける「実践力」という三層構造で構成されている。さらに、この三層構造を全ての教科や領域等を通して育てたい資質・能力であり、「生きる力」をより実効性のあるものとして注目された。また、美術科で目指すべ

き資質・能力の具体的な目標を明確化することが必要である。

2.2 美術科で目指す資質・能力の育成

中学校美術科で目指す資質・能力の育成に関し、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説（美術編）には、美術教育の目標は以下のように表している。表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。⁴⁾

（1）対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。

（2）造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

（3）美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。

日本の中学校美術科の目標と中国の核心素養と比較してみれば、（1）は中国の核心素養の「図像識読」、「美術表現」と「創意実践」の三つの素養に当たる内容であり、（2）は「審美判断」、「創意実践」、「文化理解」の三つの素養に当たる内容である。（3）は主に審美的な態度を養う目指す目標である。

このように、日本の学習指導要領に見られる育成する資質・能力の観点から、育成のための具体的な在り方に関して、核心素養を目標とする中国の教育政策の動きとは、世界の教育界の動向に共通するものであることが明らかである。

3 核心素養を背景とした美術教員養成のカリキュラムの開発

3.1 カリキュラムの開発の考えや基本理念

アメリカの教育家ジョン・デューイ

（John Dewey）の教育思想により、自ら問題を発見し、自らの体験から学び、学生の自発的な成長を促す問題解決学習法の理念がある。

⁵⁾ カリキュラムを開発するにおいて、美術教育の基礎理論の基に、現場の授業に適応できる美術教員の養成をするため、中学校美術科教材の内容から問題を発見し、テーマを決め、総合性があるカリキュラムの開発をする。その際、大学で美術科の核心素養という目標を達成するための授業計画や指導案を作り、模擬授業を実践する。さらに、大学と中学校との連携をしながら、教育実習の授業現場でも開発したカリキュラムを実践し、将来の美術教員を目指して、美術科の核心素養を目標とした授業を実践化される。このプロセスにより、問題解決学習+カリキュラム開発+授業現場の実践により、大学と中学校との連携強化が実現できる。

課題を作るヒントとして、いくつかの話題から始まる。例えば、社会から注目される話題、夢、地域社会、生命、依頼、身分、高齢化、権利、生と死、社会の秩序、情感、英雄、家庭、現実、矛盾、契約、精神などから課題を議論する。また、教科を超える大概念から、性別、環境、戦争、地域の話題、社会の話題までもできる。さらに、地域の公共的建築、名所や遺跡、スーパーマーケット、環境問題、交通、デザインなどからも課題を見つける。指導教員は生徒に課題の選択を指導する際、以下のようなことが重要視されている。まず、美術科目の課程標準の基で課題を決める。美術科の内容や方法、他の科目との関連、総合的なカリキュラムの開発を目標とする。次に、社会の話題、芸術現象、美術と生活や人生に関連を付け、生徒が議論し、考えさせる。ま

た、マスメディア、漫画、ネット、ファッション、バーチャル・リアリティなどの話題についてヒントを与える。さらに、生徒の興味がある話題を作る。生徒が自ら学習するために、課題を決めるまで、生徒のそれぞれの考えや観点を配慮し、探究心、好奇心や挑戦する気持ちを持たせ、美術と生活とのかかわりを考えさせる話題で議論し合う。

3.2 美術科の核心素養を目標とする学習方式

美術教員養成のカリキュラムの実践において、学習活動を行う際、獲得した美術の知識や技能を応用し、問題解決に繋がる能力や品格の育成が期待されている。学習方法については、従来の美術の知識や技能を中心とした学習活動を見直し、PBL（Project-Based Learning, Problem-Based Learning）という課題解決型の学習と問題発見解決型の学習方式を実施した。生徒の主体的、対話的で深い学びをすることにより、知識や技能を獲得し、自ら発見した課題を解決する能力を育成することができる。PBL 学習方式の具体的なプロセスは図1である。

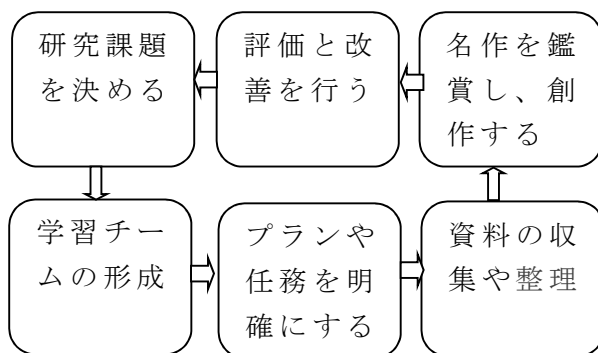


図1 PBL 学習方法の具体的なプロセス

PBL 学習方法において、生徒のモチベーションを高めるためには、問題を発見する場面や情景づくりが重要である。第四章の実証的な事例1にある「美術館の館長さんの選択」の題材において、どの名作を収蔵するかの問題

解決から授業が始まる。教員は助手の役で、生徒が専門家チームとして議論する光景を作った。また、教育課程の基準である美術課程標準に、伝統文化をどのように継承するか。生活上の不便の問題解決など、授業で取り入れる課題がさまざまである。このように問題解決の学習方法において、現実的な問題に直面する場面から課題を決め、前提として、生徒自ら問題を解決するためのチーム作り、資料の収集、分析を行い、そこから、問題を仮設して調査を開始し、問題解決の方策を議論した上で、問題解決の方策を見つける。

4 美術科の核心素養を目標とするカリキュラム開発の事例

4.1 カリキュラム開発の実証的な事例1

2018年9月に陝西師範大学の美術教職課程において、美術科の核心素養を目標とした実効性の高いカリキュラムの開発を行った。具体的には、文化、生命、歴史、生活を主題としたカリキュラムの開発を実践した。一つの事例として、陝西師範大学の学生である陳健は文化を主題としたカリキュラムの開発を行った。美術の名作を鑑賞することで、中国と西洋の文化に触れ、異なる文化への理解を図る研究課題を設定する。課題として、「名作をどのように鑑賞するか。作品の価値をどのように考えるか」の授業研究を行った。

実践された授業は以下である。（ここで紹介するのは授業展開の一部である）

題材名：美術館の館長さんの選択

授業対象：中学校二年生

指導者：陳健

授業時間：2コマ

教員の役：美術館の館長さんの助手

生徒役：専門家チーム

情景を作り出す：名画の収蔵を美術館の館長さんに助言する

基本問題：美術作品をどのように鑑賞し、作

品の価値をどのように考えるか。
 題材の目標：「図像識読」，「美術表現」，
 「創意実践」に関する目標：歴史，時代の背景，登場人物の特徴，服飾，動きなどの要素から2つの作品を比較しながら観察する。作品の労働者をどのように表現するかに気付き，自ら探究し，発想し，身の回りの労働者を表現するようにする。「審美判断」，「文化理解」に関する目標：美術作品を多面的に鑑賞し，鑑賞活動の喜びを味わい，名画に取り組み態度や美術を愛好する心情を育てようとする。さらに，中国と西洋の美術文化と精神などを理解し，尊重する態度を育て，自らの考えで館長さんに助言する。

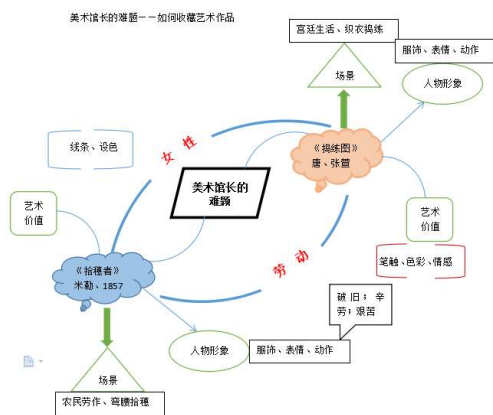


图2 陳健が授業したときの指導図

導入：教員は質問してから授業を始める。

「搗練図」と「落穂拾い」の二つの名作の展示について，どれを収蔵するか，美術館の館長さんは戸惑うところがある。教員は助手の役で生徒（専門家）に助けを求める。

授業の展開

活動1：生徒は学習チーム1と学習チーム2に分けて議論する。チーム1は「搗練図」を鑑賞する。チーム2は「落穂拾い」を鑑賞する。作品を鑑賞してから分析し，自分の考えを表す。（図像識読，審美判断）

指導観：实际的で，現実的な問題解決をするような情景を作り，学生の探究心や好奇心を

奮い立たせる。チーム1とチーム2の対立的な方式で，学習の過程で対話的な体験をさせる。

活動2：授業に関連する資料の収集や準備をし，チームの中で協力しながら議論する。

「搗練図」と「落穂拾い」の二つの名作の学習シートを準備し，鑑賞した内容を記入する。（図像識読，審美判断，文化理解）



图3 学習シート

指導観：名作を背景とした学習シートをデザインし，名作から感じたこと，考えたことを短い文やキーワードで記録することで，生徒と名作との距離がさらに近くなる。

活動3：「搗練図」と「落穂拾い」の二つの名作の拡大図を生徒全員が鑑賞し，臨場感を与え，名作との距離がさらに近くなる。

指導観：深く探究するため，二つの名作に関する資料や本を提供し，手掛かりを与える。

（図像識読，審美判断，文化理解）

活動4：鑑賞したことを発表する。二つのチームはそれぞれが担当する名作の作者，時代と背景などの基本的な情報を発表する。名作に登場する人物の特徴や動き，服飾に関して詳しく話す。チーム1は名作の人物の動きを真似し，チーム2はその動きを評価し，スケッチなどの美術言語で表現する。（図像識読，美術表現，創意実践）



図4 生徒が絵の人物の動きを真似する場面
 チーム1とチーム2はそれぞれが発表した内容をまとめ、作品に対する深い考えや探究をした上で、館長さんにアドバイスをする。中国と西洋の絵画の相違を明らかにする。
 指導観：チーム1とチーム2はそれぞれの学習シートを集め、中国と西洋の優れた文化に関して、それぞれ参考になるようなところが非常に多くあることに気付く。生徒個人の考えや立場で鑑賞した内容は、多面的であり、それを尊重することが大事だと考える。

このように問題解決型学習をする過程で、画家のように考えることが体験でき、自ら労働者を表現するような気持ちで「美術表現」への関心や意欲が深まる。



図5 記入した学習シート

美術科の五つの核心素養を目標とした授業において、現実的な問題解決に向ける能力の育成は今後の美術教育の方向となっている。授業の展開は情景づくりから始め、造形的な視点で見る名画の人物に関する特徴、服飾、社会的な背景、歴史、美術表現の手法などの鑑賞を行った。さらに、画家のように創作体験と関連づけ、教員と生徒両方の役を通して、

深い問いを探究した。学習シートの記録や議論のまとめから、相互の考えや見方を深め、問題解決に繋がるようになった。

4.2 カリキュラム開発の実証的な事例2

二つ目の事例として、陝西師範大学の学生である王俊又が、2018年9月の教職課程において、歴史を主題としたカリキュラムの開発を行った。「清明上河図」を多面的に鑑賞するという研究課題としてカリキュラムの開発を行った。

題材観：「清明上河図」は中国美術史上の風俗画として「中国第一の画」と称される。北宋の画家・張昞端は清明の時節、都の開封府の内外の人士が行楽して繁栄する様子を描いている絵巻である。「清明上河図」は多視点遠近法の構図手法が用いられ、当時の賑やかな市街図や風俗図として、貴重な歴史上の資料となる。（ここで紹介するのは授業展開の一部である）

実践された学習指導案は以下の通り。

題材名：「清明上河図」を多面的に鑑賞する

授業対象：中学校三年生

指導者：王俊又

授業時間：2コマ

基本問題：「清明上河図」をどのような視点で鑑賞し、どのように考えるか。

題材の目標：

「図像識読」、「美術表現」、「審美判断」に関する目標：「清明上河図」を観察し、描写することにより、作品の芸術的、歴史的な価値を分析し、中国伝統絵画の審美的な意識を養おう。「創意実践」、「文化理解」に関する目標：抽選で決めた研究課題をチームで協力して探究することにより、美術と社会とのつながりを明らかにし、注目するところを創意的な表現で再現しよう。

指導観：「清明上河図」を鑑賞する際、美術史の立場として、登場人物を精細な描写力などの技法で分析することに留まらず、一般の

人の立場として、生徒の生活と関連付け、歴史、社会、地理、風習、生活の面で、鑑賞しながら登場人物の気持ちを考えてみる。当時の人々の生活がリアルに再現でき、時空を超えて、現在の人々に同感を与え、創造力を膨らませ、伝統文化への理解が深まり、自分の生活に対するヒントを得る可能性がある。

導入：

情景を作り出すため、「清明上河図」のビデオを鑑賞し、質問に答えよう。

問1、どんな音が聞こえたか。聞こえた内容を真似してみよう。

問2、生徒は絵の中の人物と仮定し、何をしているかを考えてみよう。

問3、この絵に描かれた場所はどこですか。

授業の展開

活動1、近くで作品を観察する

「清明上河図」のビデオを鑑賞し、どんな言葉で情景を表現するか。

撮影技術を発明する前、古代の人々は絵画で生活を記録した。「清明上河図」は中国美術史上の風俗図として、当時の開封府の内外の人士が行楽して繁栄する様子を絵画で記録した。



図6 「清明上河図」の授業情景

活動2、作品の人物の気持ちで鑑賞する

初探：作者の基本情報は何か。この絵は三つの段階に分けているのはなぜか。宋代の人々はどんな交通手段を使ったか。面白いところは見つかったか。

さらに深く探る：美術学者、歴史家、社

会学者、現代の旅人の四つの学習探究チームを形成し、封筒に用意してある問題を探究する。生徒が議論した内容を発表し、展示する。

指導観：「清明上河図」を鑑賞する際、歴史的な様々な視点で分析しながら、異なる分野や角度で深く鑑賞し、総合的に美術科の五つの核心素養を融合させる。美術学者：画家の基本的な情報、絵の構図、造形的な言語（線、色、形など）に着目する。歴史家：都市の中核、賑やかな街に着目する。社会学者：交通手段、家や建築、虹橋、調理器具に着目する。現代の旅人：女将、物貰い、僧侶、ラクダ、サルなどに着目するよう指導する。

活動3、私が好む作品の一部を模写する
教員は生徒の探究チームに四つの課題を与え、生徒が探究して表現する。

任務1：絵の中の好きな人物の服飾を観察し、模写する。

任務2：宋代と現代の交通手段の変化を比較し、絵や図像で分かりやすく分析する。

任務3：絵の中から好きな一部分を選んで、興味のある話題を探究し、絵や文字で説明する。社会光景、建築、お菓子、職業などに関する物語を作る。

任務4：「清明上河図」の中に興味のある部分を想像し、スケッチで再現してみる。

授業で設定した学習活動は美術科の核心素養の目標と融合し、「清明上河図」の鑑賞から始め、議論することにより、作品の芸術的、歴史的な価値を分析した。さらに、問題解決のため、学習チームの探究活動を行い、美術的表現をするとともに美術と社会の関連付けを行った。

4. おわりに

小・中・高校までのいわゆる基礎教育における美術教育では、核心素養（キー・コンピテンシー）の育成を促進している。そのため、教員養成課程においても、前述の事例で述べたように、中学校との連携による教育実践を

重視した教育方法，教育内容が進められている。

大学の教員養成を含めて美術教育の実践では，美術における核心素養である「図像識読」，「美術表現」，「審美判断」，「創意実践」，「文化理解」の五つの能力の育成を目的としている。小・中・高校においては，この能力を育成することを意識している。

美術教育の目的は「美術による教育」と「美術の教育」に大別して試行錯誤の変遷をしてきた。「美術による教育」は美術を通しての教育であり、最終的にはよりよい人間形成を目的としている。「美術の教育」は美術そのものの教育を目的としており、美術の表現と鑑賞や知的理解によって、美術の能力を獲得することを教育内容としている。美術を媒体として「美術の教育」があり、その延長線上に人間形成を目的とする「美術による教育」があると想定できる。

核心素養は人間的資質や能力の要素である。素養を育成する媒体は美術科だけではなく、人文科学、社会科学、自然科学の領域の要素の全てであり、小・中・高校の教科の全ては人間形成を目的としていると言っても過言ではない。そうした教育の構造において、小・中・高校の美術教育とその教員となる教員養成では、核心素養を基盤として次のような方策が考えられる。

核心素養を背景とする基礎美術教育において、美術教員の養成を目指したカリキュラムの開発、授業づくり、実践的指導力、評価や改善などを促進するための支援策を検討する必要がある。生徒の核心素養を目標にするためのカリキュラムの開発について、以下の点が重要視される。まず、教育課程の基準である美術課程標準への深い理解や解説することを基本にし、美術課程標準で示された学年の目標や内容を踏まえ、生徒の立場で考え、生徒の実態などを基に研究課題を設定することである。

次に、美術教員自身の文化的素養，科学的素養，豊かな人間性や社会性，探究力，想像力，自ら学び続ける研究能力など含めた総合的な素養が必要である。さらに，美術科についての専門的な知識や実践的技能を修得し，学び続ける力を伸ばしていくことも必要である。そして，情報化社会に適応する情報機器や設備，教材などを活用し，家庭，地域，関連機関と連携をしながら，社会の変化に対し，新しい課題を作り出すことも期待されている。

世界教育改革の潮流として，OECDの「キー、コンピテンシー」をはじめ，日本の「21世紀型能力」，アメリカの「21世紀スキル」，中国の核心素養など，育成すべき人材の資質・能力を明確化した上，その育成に必要な教育の在り方や学習指導の改善のための学習評価などが今後の課題である。

（中国，陝西師範大学 副教授）

（山口大学理事・副学長，大学教育機構長）

【付記】本稿は陝西師範大学教員出国研修計画の援助を受け，さらに，2018年度陝西師範大学研究生院の教育教学改革の研究課題の一部としてまとめたものである。

【参考文献】

- (1) 中華人民共和国教育部 WEB サイト
http://www.moe.gov.cn/srcsite/A26/jcj_kcjcgh/201404/t20140408_167226.html
- (2) 中華人民共和国国務院 WEB サイト
http://www.gov.cn/zhengce/content/2017-01/19/content_5161341.htm
- (3) 中華人民共和国教育部，2017年，『普通高中美術課程標準』，人民教育出版社
- (4) 中華人民共和国教育部（2011版），2012年，『義務教育美術課程標準』，人民教育出版社

(5) 国立教育政策研究所，2013年，『資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理』（教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 7）

【注】

- 1) 尹少淳，2018，『美術核心素養大家談』湖南美術出版社， P22
- 2) 尹少淳，2016，『尹少淳谈美术教育』人民美術出版社， P 164

3) 国立教育政策研究所，2013，『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』（教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 5）， P26

4) 文部科学省，2018，『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説』美術編）， P9

5) John Dewey，王承緒訳，1990，『民主主義与教育』，人民教育出版社， P 150